



# 人間形成 ある家庭

毎日新聞社編

日本財団支援

光風社書店版

# 人間形成 ある家庭

昭和四十年十月十五日 印刷  
昭和四十年十月二十日 発行

△検印省略▽

定価 三八〇円

編者 毎日新聞社

発行者 豊島 激

印刷者 菅生 定祥

発行所

株式会社光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四  
電話東京(四一)〇二三八番  
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

## 目次

土と光をいっば  
 家に九男三女あり  
 子供のため貧乏をかう  
 かあちゃんは負けない  
 二月―わが子は受験生  
 陸に上がったダルマ船一家  
 われら一族〃銀座原人〃  
 このすばらしい母娘  
 “三脚一家”の記録  
 夕張惨事に泣く  
 集団就職の日近く  
 冬山は悲し  
 ふたごの坊やは一年生

七 九 三〇 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

|               |    |
|---------------|----|
| この子らの母親がわりに   | 一五 |
| 再起めざす炭鉱離職者    | 一六 |
| ふるさと遠い南の島     | 一七 |
| がんばる父子農業      | 一八 |
| アイデアいっぱい      | 一九 |
| わが家に五カ条の憲法    | 二〇 |
| 日本に生きる韓国人一家   | 二一 |
| 歩けなくても、生きるんだ  | 二二 |
| 海女三代・志摩に生きる   | 二三 |
| 明るさ戻った母子三人    | 二四 |
| 瀬戸内海の〃一六〇人家族〃 | 二五 |
| 知恵の遅れた子を持って   | 二六 |
| わが家の遺産は勇気と決意  | 二七 |

裴  
幀  
  
吉  
田  
  
善  
彦

人間形成  
ある家庭

家庭のしあわせとは、いったい何だろう。それは、そこに生きる人と人との素朴な触れ合いのなかに生まれる。そして、それが明るいあすの社会の基礎を築く。ところが、今日、わたくしたちの周囲には、弱体化し、崩壊しつつある家庭も少なくない。現代がいかに人間疎外の時代であっても、いやそれだからこそ、わたくしたちは家庭が本来もっている人間形成の機能を回復させなければならぬ。その方法を、現代に生きるさまざまな家庭の姿のなかで考えたい。

登場する家族の氏名は、ときに仮名を用いることがあります。

土と光をいっばい

父 森田宗一

母 良子

二男（湘南高校三年） 望

長女（恵泉女学園高校二年） めぐみ

二女（同中学二年） さゆり

三女（同中学一年） いこひ

長男（東大三年） 明Ⅱ英国留学中

子供には、土と水と光を与えよ——これが森田家の育児憲法第一条である。五人の子供を大自然のなかに放り出すには、少々ゼニもかかったが、これだけは家計をぎりつめても実践した。大自然のなかでの奔放な生活体験が、どの子にも活力と豊かな創造力をもたらした。「子供は盆栽ではない。安直なテクニックを用いる前に、まず自然のなかに放り出せ」と強調する。父は東京家庭裁判所判事、上智大学、日本社会事業大学講師で、少年問題の権威。母は小児科の開業医で、お母さんたちのよき育児相談相手。という、いかにも「実験家庭」みたいだが、五人の子供たちはどっこい、モルモットみたいなナマやさしい存在ではない。視野も広く、気力充実、みんななかなかの論客であった。

### 森田家の座談会

——ここには長男の明さんがいないので、欠席裁判みたいな形になりますが、まず森田家のホープというかたいへんな偉丈夫らしい明さんについてうかがいましょうか。

父 オーケストラのコンダクターがいらないようなもんだな。いま東大三年ですが、途中で休学して欧州へ行った。世界を少し見て、それから人生の方針を決めたいというんでね。昨年八月、アラブ連合のアレキサンドリア大学で国際学生のセミナーがあった。それを足場に世界——といっても



左からさゆりさん、望君、良子さん、宗一氏、いこひさん  
めぐみさん、一笑顔あふれる一家

欧州ですが、大いに見聞をひろめ、帰りには自動車  
かオートバイで日本に帰ってくるといつてゐるんです。  
母 私は知らなかったの。ゲタを持って行つて、  
ゲタをはいて街角で手品をして……一緒に行ったお  
友だちからそんなことを聞きました。

父 いまはロンドンの学校にはいつてゐるんだが、  
どうしているのかさっぱり消息がわからない。風の  
たよりに、各国の留学生と一緒に安宿に住んでみた  
り、労働者と一緒に生活したりしてゐらしい。

母 一年の予定で行ったんですが……お金がなく  
なったらどうするのといったら「金がなくなつて、  
ノメノメと帰るような根性なしじゃない」つて。

(笑)

自然の中で育てる

——お家からは一銭も援助なしですか。

父 アラブ連合は行きだけはこっちが出して、あと滞在費は向こうが出してくれた。あとは借金したんですよ、私の名前です。だけど私のところは親としては決して与えない。だから返せといっている。(笑) あれは行く前に小説をデッチあげたんですよ。本屋とも約束してね。だけどそれは一応留保したんです。まあ帰ってきて、それを基盤に一年の遍歴を書くといっています。これは大体の契約をしている。

——小さいときから外に向かって行くような性格がありましたか。

父 それはすごいもんです。生まれたとき産院のどの部屋にも通るような泣き声をあげましてね。(笑) だけど虚弱児みたいな時期もあった。戦時中の子ですから。

母 肺門リンパ腺になったんです。

父 戦時中は信州に疎開していて、その後、神奈川県の「しらゆり農園」へ移ったんです。農園という立派そうに聞こえるが、吹きっさらしの丘の上の引揚寮ですよ。そこでブタやヤギなどと一緒になったり、チョウチョウを追いかけてたりして過ごしましてね。農園は二年くらいでこの家を建てましたが、自然の中の生活というものに病みつきみたいになって、毎年夏になると一家あげて信州の山へ行ったりしましたね。小さな子ばかりたくさん引き連れて、ちょっとした民族大移動で

したよ。自然にとけ込んでいったことが、心身ともに健康の基礎になったんだと思う。海外ではそういうことを意識的にやっている教育政策とか家庭が多いが、日本は便利に流れすぎて、子供も歩かない。すぐ乗物に乗る。私は「豊富社会の危機」といつているんだが、つまり物質的豊富さの中で人間性が喪失していく危険がある。人間には、ことに子供には土と光と水を与えよという主張なんです。川へジャブジャブ飛び込んだり、山へ登ったり、そうした中で人間関係を持つことが人間形成の基底だ。それがいま失われている。虚弱児だとか、根性がないとか、ねばりがいないとか、あるいは水泳、陸上選手の間が薄いとか、こうしたヨロズの根本だと思うんですよ。

母 兄貴観というのを、どう？（笑）

望 そうね。小さいときはスゴクケンカしたが、だんだん仲よくなってきた。（笑）小さいときやりすぎて最近はどうも心の底がわかったから（笑）まあ小さいとき兄貴に鍛えられて——みんな四人ともね。（笑）それでかえって仲よくなったんじゃないかなあという気もする。兄貴は変わったようなところがあるけど、僕なんかも一緒にチヨウチヨウ集めの手下なんかになって（笑）野山をかけ回された。

父 家族は四人、五人いるということが自然だと思う。兄弟が多いと自然に忍耐とか他人の身になるとか、わがままにならぬとかいう心もつちかわれていく。長男など、高校生くらいのとき「も

し一人っ子なり二人っ子だったら、僕はいまごろ久里浜の特少（特別少年院）あたりに行ってるだろう」って……。 （笑）

望 大きくなってみると、五人兄弟でほんとうによかったと思う。むしろいまでは少ないくらい……。

父 いこひなんかも、小学校の卒業のおり「お母さんになったら何人ぐらい子供がほしい」といったら友だちはみんな二人か三人というのを、一ダースほしいといったとかで（笑）相当意欲的なんだ。

めぐみ 子供は多い方がいいという話だったけど、きのうお父さんは洋服屋さんに何人でも産みなさいといったら、そんなことしたら食べていけませんっていった。

父 そういう問題はもちろんある。それは解決しなければならぬ。しかし少なくとも方向で解決したんでは、民族の生命力がなくなってしまう。

めぐみ 産みたくとも産めない人だっている。

父 それは日本の政治がいけない。たとえばこのへんのアパートでも、子供が二人になったら出てもらうという約束ではいっている。住宅政策がなっていないですね。

## 小づかいにも方針

——お小づかいはどう？

望 小づかいはもらわないんですよ。(笑) 家じゃくれない制度で。(笑)

姉妹一同 そう、ないの。(笑)

望 小づかいというのは、決まった額の中でやるのと、必要なときにもらうのと、どっちがいいのか僕にはよくわからない。

父 必要なつどあげるということにして、一カ月いくらと割当制はしていない。

さゆり どうせもらっても、また巻きあげられるもの。(笑)

母 月給日の前になるとみんな巻きあげられてライスカラーになっちゃうの。(笑)

父 このごろはお手伝いとかアルバイトとかいうと、すぐ報酬を見積もって要求する。家じゃそういうことはないが、私にいわせれば、お手伝いとかアルバイトとかいうのは、いわば人生を渡る船の、その船乗りのけいこだ。それも、タダで習わせているんで、報酬を請求するなどってのはかだと思ふ。小づかいはほしいとき、必要なら少なめにやるというのがちやうどいい。

母 いまでは、たいていの家が子供のお小づかいというものをちゃんと計画を立てて与えている。

それは一面とてもいいことだと思いますが、半面その弊害というものもずいぶん出てますね。よくお母さんたちから、どうして家の子はこうドライでがめついんでしょう、というようなことをいわれるんですが、よく聞いてみると、子供たちはお金をためる趣味みたいになっちゃうんですね。

### 人生は各駅停車で

——望君、高三だと受験でたいへんだね。

**望** 受験期なんだけれども、僕はあまりそういうことを気にしていない。まだ一年と何日かあることにしているんだから……。 (笑)

**父** 生方たつゑさんの「急がない人生」という本にもあるが、いまは世の中が何かツマ先立って、前のめりだと思う。人も機構もそうだ。もっと各駅停車で行くべきだと思う。この辺は静岡、次が名古屋というように、土地の風物を見ることが必要だ。人間の一生も、政治、経済、教育も、もう少し立ち止まって静かにするとか、前後左右を見るとか、子供たちにそういう生き方を教えるべきだ。

**望** 高校ではじめはいろいろスポーツをやっていたんですが、こんどは社会の勉強をやって活動もしてるんです。たとえば新聞なんか読んでも、いろいろ疑問なんかあるから、そういうことを自